２０２２年１１月６日『アブラハムの選び』青戸教会　高橋克樹牧師

創世記１８章１～１５節、ルカ福音書３章１～１４節

本日の創世記のテキストはアブラハムの妻サラに男の子が生まれることが、三人の見知らぬ人たちによって預言される物語です。アブラハムは甥のロトを連れて約束の地カナンに向かいましたが、それはアブラハムがロトの育ての親であったからでしょう。自分たち夫婦に子どもがいないために、ロトを自分の財産の相続人と考えていたのです。後にロトの家族と別れる時に好きな方の土地を選ばせたことや、ソドム滅亡を事前に知ったアブラハムが必死で神と交渉をしてロトの救出を試みたことをみても、実の子のように寵愛していたと思われます。

死海の東岸に面したヨルダンのモアブの地は現在でもその舗装道路は凸凹だらけで、私が聖地旅行をした際も、バスの運行は日本のようにスムーズではありませんでした。しかし、道路の両脇では果物や野菜の露天が並び、遠い昔の日本の匂いがしました。イスラエル側から死海の対岸のソドム、ゴモラがあったと思われる山を見ると、そこは岩塩の山で、あちこちに洞窟があります。さて、アブラハムはファラオからの贈り物の家畜や金銀で裕福になったのですが、逆に家畜が増えたことで従来の井戸や牧草地では養いきれなくなって、そのことが原因でアブラハムは一族を二つに分け、一つは自分が率い、もう一つは甥のロトが率いることになりました。しかし、根本的な解決とはならず、結局は使用人同士で争いが起こりました（創世記１３章）。この緊張関係への対処をアブラハムは非常に懐の深いやり方で解決します。甥ロトに自分が住みたい土地を選ぶように優先権を与えたのです。豊かな土地を見分ける目を持っていたロトは、水の豊富なヨルダン川流域の低地を選びました。しかし、その後のロトはヨルダン川東岸の肥沃な土地をめぐる争いに巻き込まれて捕虜になります。そこでアブラハムは戦闘員を組織して、ロトを救出します。そのことを見てもアブラハムはロトを我が子のように扱っていたことがわかります。そのような出来事のあとで神はアブラハムに子供を与える約束をします（１５章）。その時のアブラハムはこの神の約束を信じていません。そして、妻のサラの女奴隷のハガルによってイシュマエルが生まれたとき、アブラハムは既に８６歳でした（１６章１６節）。

その後、アブラハムにイサク誕生のお告げがあるのです。あるときアブラハムが天幕の入り口にいると、神が三人の人間の姿を借りて彼を訪ねてきました（創世記１８章）。アブラハムはこの男たちが神であることを知らなかったのですが、ベドウィン族のしきたりに従って、心から旅人をもてなしたのです。いずれにしても、アブラハムは神から子どもが与えられることを告げられても信じませんでした。今日のテキストでサラも同じように信じることができずに、神の約束の言葉を笑ってしまったのです。けれども、アブラハムが神の約束を信じていないなかで、神とは知らないで神に出会い、もてなすことをすることになったところに神の選びがあるのです。１８章の最初の所でアブラハムが三人の旅人をすぐさま歓待する行動をとっているので、アブラハム自身の発意で旅人をもてなしているように思いがちですが、実は神がアブラハムを訪れ、約束の成就へと向かわせるために訪れたのです。アブラハムが見ず知らずの旅人を受け入れたのは、アブラハム自身も寄留者としての生活をしていたからです。しかし、そのようなアブラハムの認識を越えて神は三人の人間の姿で現れたので、アブラハムもまさかこの三人が神だとは思いもしなかったのです。ただ、見知らぬ旅人をもてなす行為が、実は知らず知らずのうちに神に仕える行為となっていたのでした。しかも、まず神がアブラハムに仕える（＝選ぶ）ために訪ねてきたのです。来年には男の子が与えられるという大切な私信を伝えるために神の選びが最初にあったのです。イスラエルの歴史では、神の選びは１２章冒頭にあるように契約による選びであり、神の側からの先行的な行動が先にあるのです。この神の行動が約束の成就へと向わせ、事柄が進んでいく過程で人は神と出会うのです。こうして歴史は神と人の出会いの場として刻まれていくのです。

見えざる神の導きに従順であることは、人間の心の中に働き給う神の恵みのしるしです。アブラハムが時を失せぬかたちで素早く神をもてなしたのは、単なるもてなしの美徳ではなく、神の選びがどこにあるか分からない中でのアブラハムの選びなのです。

隣人を愛し、仕えることはイエス・キリストがおられることによって成り立つ業ですが、神の選びに応えていくという姿勢がなければ、神の選びに気づくこともありません。神はアブラハムの名を直接に呼ぶことによって、サラも神の選びという恵みの前に召し出されました。しかし、恵みの光に照らされるためには、彼らの弱さや隠された不信がそのままではいけないのです。彼らは神の祝福を何度も与えられて生きてきましたが、人間の側には神への根本的な不信があります。彼らは現実にはすっかり年老いてしまっていたので、人間的な知恵では子どもが授かる望みはないのです。

三人の男たちは突然いとまごいをして旅立つのですが、その道すがら『わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があろうか』（18章17節）と言って、ソドムとゴモラを滅ぼす目的があることを知らせてしまいます。そこでアブラハムはロトのことを何とか救うために神と交渉を繰り返すのです。そして、45人から始めて最終的には10人の義人がいれば滅ぼさないことを約束させます。すでに神はアブラハムにカナンの地を与えることを約束していますが、神は再び彼と約束をするのです。この神によるアブラハムとの約束の延長上に救い主イエスの誕生があるのです。ソドムでもロトがこの二人の御使いを温かく迎えました（なぜか三人が二人に減っています）が、ソドムの男たちが男色を欲したので、神は結局ソドムを滅ぼすことにします。ただロトと家族は救おうと、せき立てて町から脱出させますが、ロトの妻が後ろを振り返ったために彼女は「塩の柱」と化してしまいます。

私はこれまでアブラハムによる幾度にもわたるロトの救済劇を彼の愛情と単純に考えていました。しかし、ロトの救済がなければ、ダビデの誕生がおきるわけもなく、イエス誕生へとつながる細い細い救済の糸が途切れてしまうのです。さて、ロトたち一家だけが助かったために周囲の人々から恐れられて、ソドム近くのツォアルという町に住むことができず、塩の洞窟で生活するようになります。せっかく助かったのに周囲の人々から排斥されたために、ロトの娘たちは不安に襲われます。このあたりに男がいないことを憂え、父親を酔わせて子をはらもうと計画します。やがて姉娘は息子を産み、その子がモアブ人の先祖になり、妹娘の子がアンモン人の先祖になります。これが現在のヨルダン国になるのですが、ヨルダンは歴史的にはイスラエルとたびたび敵対しました。モアブというのは「父親より」という意味ですから、その名前自体が悲運さを示しています。この近親相姦の話を神の救済と関係があることとして、私はこれまで意識したことはありませんでした。しかし、父親のロトは酔っぱらっていて、娘が寝に来たのも立ち去ったのも気がつかなかった（19章35節）という記述に今回初めて気づき、なるほどと思いました。

それは創世記2章でアダムにエバが与えられたとき、神はアダムを深い眠りに落として、彼の肋骨でもってエバを創造します。神の創造のみ業にアダムは全く関与していないのですが、人間が深い眠りにあるということが神の意志が働いている証拠なのです。同じようにこの近親相姦の背後にも神の意志が働いているのです！　のちの士師時代にカナン地方で飢饉が起こったために、ベツレヘムに住むエリメレクと妻のナオミはモアブの地に移り住みます。息子二人はモアブの娘と結婚して、異教の地での生活の根拠を手に入れます。しかし、ナオミの夫の死に続いて二人の息子も死に、ナオミはベツレヘムに帰郷することを決意して、二人の嫁にモアブに残るように言います。しかし、ルツだけは『あなたの神はわたしの神』と言って、ナオミと行動を共にします。この帰国はルツにとって辛い現実と遭遇することを意味していました。なんとか落ち穂拾いをして命をつなぎます。そのときルツを助けるのがボアズです。ボアズはエリコの遊女ラハブの息子で（ヨシュア2章1節、マタイ1章5節）、ボアズがルツと結婚することでオベドが生まれ、そのオベドからエッサイが生まれ、エッサイから8人の息子が生まれて、最後にダビデが生まれるのです。こうしてイエス・キリストの誕生への道筋がつきます。

神の意志はさまざまな出来事を用いて、最終的に救いを実現させることを改めて深く思わさます。財産が増えたことで親族間に別離が起こり、せっかく神によって救済されたのにそのことで生きる目当てを失いかけて近親相姦が起きてしまう。飢饉が敵対的な国であるモアブで生きる道を選択させながら、やっと異教の地で生活基盤が築けたと安心したとたんに今度は愛する者を次々と失い、傷心のうちに帰郷しなければならなくなる。しかし、ルツが姑との困難な道を選択することでボアズとの結婚が実現し、そのことでダビデが生まれる契機となります。どの出来事をとっても神の摂理が、人間的な思いを越えて働いていることを知らされます。困難や失敗の出来事の背後にも神の意志が働いているのですが、それらの神の選びに応えていくアブラハムの選びがあったからこそ、救い主誕生への道筋が整えられていったのです。そのことを覚えて、私たちも神に選ばれた人生を選ぶ人生の選択をして歩んでいきましょう。

2